

約1年前、私は暗い劇場のなかで、カルチャー・ショックを探るべくドラマを活用する大学院生のグループを眺めていた。日本、台湾、中国、韓国からやってきた学生たちの誰もが英国にやってきたのは学ぶためだったわけだが、英国文化に多くのサプライズを見いだしていた。母国そして旅先での異なる経験が、それぞれのストーリーのコラージュを織りなし、世界を回るに連れて私たちのアイデンティティがいかに変化し、いかに流動性が新しいあり方で私たちの考え、感じ、振舞いに挑むものなのかを語った。ある夏の暑い日の午後の劇場の雰囲気は明るく、ユーモアに溢れていた。学生たちは穏やかに英国のあり方を指摘し、自分たち自身の文化的誤解を笑い飛ばした。

私自身の日本訪問を前にして、これらの学生たちが語ったストーリーを思い返した。参加者たちの自伝的なストーリーの鮮明さと、それぞれの土地の神話や伝説を分かち合うことは、文化を越えるものになるドラマの力を示した。ワークショップを率いた応用演劇実践家シュー・イー・チェンは、ドラマは人々が自分たち自身の経験をきりとり、枠組みをあたえ、想像的な世界を探求するのを促すものであると認識した。このプロセスは、ダイナミック、コラボラティブ、そしてサポーターティブなものとして設計されている。参加者たちは自分たちの文化がもたらす思い込みを認識し、自分たちの限界を広げるべく自分たちが培ってきたストーリーを分かち合うのである。学生たちのパフォーマンスで私

ドラマ教育特集号

応用ドラマの創造的出会いー日本に期待するもの

ヘレン・ニコルソン

theatre & policy no.43

を感動させたものは、自分たちの文化のあいだにある差異を認識するとともに、分かち合われた経験を省察する能力である。ドラマという場でストーリーを語ることが、自分たちが生きてきた場所を問い、形成されてきた自分というものの想像を可能にしたのである。

日本での私のワークショップが、文化の境界線をまたぐものになることを意図するものだが、喜ばしい創造的な体験を期待してもいる。確かなのは、はじめての私の日本への旅によって、私の期待と思い込みが挑戦されることであり、参加者たちから私が多くを学ぶということだ。応用ドラマに働くことはいつも特別なものであり、異なる地域共同体の素晴らしい人々との出会いを可能にする。異なる場とコンテキストを持った参加者たちとストーリーを分かち合い、ドラマを通して、新しい文化的ジェオグラフィーを探求しうるのであろう、この機会にエキサイティングなものを感じている。

日本でのワークショップにおいて、私が焦点をあてたいと考えているのは、二つの相互に関係するテーマとしての「ナラティブ(語り)」と「シティズンシップ」である。ストーリーというものは、しばしば特定の場所に係わるものだが、ストーリーはまた旅もする。その過程で、ストーリーは変換され再解釈されるのである。異なるナラティブとの私たちの関係がこそ、私を魅了するのだーそのストーリーが自伝的なものであれ、架空のものであれ、あるいは伝統的な昔話として世代を越えてきたものであれ。

ワークショップで私が計画しているのは、様々なナラティブを紹介し、ストーリーを語る異なる方法を探究することである。演劇人としての私自身の経験を分かち合うとともに、新しい創造のあり方を学びたいと願っているのだ。

シアター＆ポリシー 通巻43号
2007年6月20日発行
編集・発行人 中山夏織

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク
〒182-0003
東京都調布市若葉町1-33-43-202
Phone & fax 03-5384-8715
e-mail tpn1@msb.biglobe.ne.jp
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn/>

ヘレン・ニコルソン

Dr Helen Nicholson

ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ演劇学部上級講師。様々なセカンダリー・スクールの英語ならびにドラマ教師を経て、1989-92年、ブリストルのブリスリントン・スクールの芸術主任を務める。1992年より、ケンブリッジ大学ホマートン・カレッジで演劇を教えはじめ、1998年から演劇学主任となり、演劇学ならびにドラマ教師の育成に携わる。2000年、ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジへ移り、2005年より現職。現代演劇全般ならびに児童青少年演劇に加え、ドラマ・イン・エデュケーション、シアター・イン・エデュケーションといった応用演劇を専門とし、英国のみならず、世界的に活躍。ドラマを活用した人権やシティズンシップ教育、また自分たちの物語をひきだして演劇へと発展させていく第一人者。

主な著書に、『応用ドラマー演劇の贈りもの』(2005年)、共著に『ティーチング・ドラマ11-18歳』(2001年)。近日刊として、『パフォーマンスを創造する』(共著、2007年予定)。

ストーリーは私たちが何者なのかを教えるものであり、これが抽象的な概念であるシティズンシップのためのナラティブの探求につながっていく。シティズンシップは、単なる法的な段階ではなく、インターナショナルな境界線を越えるパスポートでもある。それはまた帰属感覚であり、社会にポジティブに貢献することでもある。この参加者シティズンシップ(participant citizenship)の理想は、多くの若い世代がグローバリゼーションの影響によって地元の文化が脅かされる世界で育っている状況において、急速に重要性を増している。もし教育がグローバルな市場の要求に占領されていないならば、異なる文化を学ぶために、そしてグローバルな市民になることが意味するものを考えるために、若い世代を招き入れる芸術の役割に、私たちは価値を見いだせるだろう。応用ドラマは、人々が他人の立場を想像する方法を見だし、生きるために新しい可能性を拓くために、ストーリーを語る異なる方法を見いだすのを助けるものである。私のワークショップが、昔話を探求し、劇的なナラティブを探求し、地元のストーリーを分かち合うことを通して、参加者たちをドラマという想像的な旅へといざないたいと願う。異なる多くの人々によって語られたストーリーに耳を傾け、シティズンシップとナラティブに関する様々な異なる経験を分かちあえるということに私は誇りを覚える。

拙著『応用ドラマー演劇の贈りもの(Applied Drama - The Gift of Theatre)』で、私は共同体のコンテクストにおいての演劇創造のプロセスを省察するために、「贈与(the Gift)」という隠喩を用いている。贈与は相互利益につながり、また寛大さを示すものである。そして、また贈与というものは、日々の社会的関係の重要な部分でもある。ヨーロッパ言語の中には、しかしながら、「gift」という語が、「毒」と同様の意味をもつことがある。これがまた示すのは、あるコンテクストにおいて、贈与が必ずしも歓迎されるものではないことなのである。日本は「贈りものを与える」文化であると聞いている。私は演劇の持つやさやかな贈りものをいただけることだろう。謙遜をもって、私の来るべき日本への訪問に期待するものであり、文化的な境界線をまたぐダイアログにやさやかな貢献ができることを望んでいる。中山夏織女史のエネルギーとビジョン、そして日本財団のご支援に感謝したいと思う。

(へれん・にころそん／ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ上級講師)

ヘレン・ニコルソン博士の応用ドラマ・ワークショップ(東京&大阪開催)

「シティズンシップと私たちの物語」

青少年たちは、自分たちの帰属する社会のなかで、他者と出会い分かち合いを通して、健全なシティズン(市民)として成長していきます。いじめ、ニートやひきこもりといった青少年をめぐる社会問題は他者が見えないために自分が見えなくなる…自分という存在のアイデンティティが揺らいでいるからかもしれません。英国で発展したドラマ&シアター・イン・エデュケーションは安全に守られた環境のもとで青少年たちが自分と他者との関係をみだし、健全な自己中心性を獲得し、社会とコミュニケーションしていくための「生きる練習」の場として発展してきました。次代を担う青少年のために、教育や演劇、コミュニティにできることは何か。青少年たちを自立したシティズンに育てていくことに主眼を置いたドラマ・ワークショップです。

指導者育成対象ワークショップ(教師、大学生、俳優・演出家、コミュニティ・ワーカー他)

<東京>

日時 2007年9月16日(日)&17日(月・祝) 午後1時~7時
会場 あうるすぽっと<豊島区立舞台芸術交流センター>3F
参加費 14,000円
定員 25名

<お問合せ・お申込み>

東京 tpn1@msb.biglobe.ne.jp

主催 特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

<大阪>

日時 2007年9月23日(日) 午前10時~午後6時
会場 大阪市立芸術創造館
参加費 6,000円
定員 25名

大阪 nobuyoshi_yagi_1961@ybb.ne.jp

助成 日本財団



ドラマ教育は学校に「普及」するのか？

渡 部 淳

学校教育の場で過ごすこと30年。教育思想や教育技法が海外から押し寄せては廃れていく様子をこれまでいくつも見てきた。その視点から、学校教育とドラマ・ワークの関係について考えてみたい。

雑駁な印象だが、ここ数年、ドラマ・ワークショップの開催がすこぶる隆盛である。年間に届く案内状だけでもかなりの数にのぼる。かくいう私も、今春、異文化間教育学会の研修会「学びを全身化する方法―演劇的手法によるワークショップ」を、高尾隆（一橋大学）、小林由利子（東横学園女子短大）、吉田真理子（津田塾大学）の各氏と一緒に運営したばかりである。参加者のほとんどは大学に籍をおく人たち、ドラマ・ワークへの関心は大学教育にも及んでいるようだ。

ただ実際のところ、日本における「ドラマ教育」の内実はそれほど明確ではない。それに、現在の教育環境は厳しく、「願っていれば誰かが叶えてくれる」といった牧歌的状况からはかけ離れたものである。何を普及するのか（中身）、誰に普及するのか（普及の相手）、普及の担い手はだれか（狭義の演劇人それとも教師？その両方？）、ドラマ教育の有効性をどう論証するのか（検証）、受験学力への回帰のなかで教育システムのどこにどう組み込むか（戦略）、などの点が明確になれば、恐らく飛躍的な普及は難しいだろう。こうした基礎的作業―普及のための環境整備―に無頓着なままでは実効性が乏しい。

ディベート・ブームの轍

現在の状況は、ディベート・ブームが始まる直前―1980年代末から1990年代初頭―の雰囲気を取り戻させる。ブームに先駆け、1980年代前半から「ディベート教育」に取り組んでいた関係で、実践を発表し、本を執筆し、学校、市民団体、公共団体の主催するあちこちの講座に指導にでかける日々も過ごした。

ブームが到来したらどうなるのか。ピーク時―1990年代半ば―になると、小学校段階から高校段階まで、まるでディベート実践の発表を抜きにして公開研究会は成り立たないかのような観を呈した。もっともその頃には、私の関心が「演劇的技法を用いた教育」に完全にシフトした関係で、ディベート・ブームから距離を置くようになっていたのだが…。

では、ディベート・ブームが一段落して何が残ったのか。その判断は微妙なところだ。ディベートという言葉は教育界に定着したし、技法の認知度も高くなった。これを普及というなら、たしかにそうだろう。ただ、ディベート教育の普及が、「人柄と事柄を区別し、事実に基づいた討論が成り立つ」というような形で、われわれの言語風土に影響を及ぼしたかといえば、「いまだに道は遠い」というのが実感である。

この轍を踏まないためには何が必要なのだろうか。

一つは、海外の理論・実践の直輸入では学校現場への定着が覚束ないことを明確に認識することである。その一方で、ドラマ教育普及の志をもつ人々が、それぞれの現場から上述の環境条件をクリアするような内実を創りあげることが必要である。

私の試みについて言えば、2006年の春に「獲得型教育研究会」を創設し、参加型アクティビティの体系化と教師研修システムの開発に3カ年計画で取り組んでいる。ここでは小学校から大学にいたるあらゆる教育場面—教科の授業、特別活動から父母会の会合まで—にドラマ・ワークを導入し、参加型アクティビティとしての汎用性について検証する作業を続けている。この3月に出版した『教師学びの演出家』（旬報社）は、この研究のためのいわばコンセプト・ペーパーである。

また同じく6月には、「表現するということがすべての学びを貫く重要な要素である」という視点から、論文作成、即興スピーチ、ディベート、演劇のプレゼンテーション、ドラマ・ワークなどを一体的に構成したスタディ・スキルズのテキスト『大学生のための 知のスキル 表現のスキル』（東京図書）を刊行した。

ディベート教育でさえ、定着するまでにかくも難渋していることを考えると、より複雑で多様性に富むドラマ教育が定着するのに長い時間を要するだろうことは想像に難くない。まずは「日本の教育の現状」という足元を確認しながら、人的ネットワークを拡大し、焦らず着実に進みたいと考えている。

（わたなべじゅん／日本大学教授）

ドラマ・イン・エデュケーション2007サマースクール駒ヶ根

ケン先生の指導のもと、英国のドラマ教育の真髄を体系として学ぶための、7つのワークショップ&ディスカッション・セッションで構成される3日間。中央アルプスのふもとの豊かな自然のなかで、ぎっちり、みっちり集中的にドラマ教育の理念と実践を学びます。その手法や効果を体感・考察することとおして、日本の教育に何が有効なのか、何が異なるのか—日本型のドラマ・イン・エデュケーションを構築していくことを目的としています。

日程／2007年8月3日（金）～8月5日（日）

会場／飯島町文化館（長野県上伊那郡飯島町）

講師／ケネス・テイラー（英国ミドルセックス大学）

参加費／25,000円

定員／25名

対象／教師、大学生、俳優・演出家、コミュニティ・ワーカー他。

助成／日本万国博覧会記念基金

主催／特定非営利活動法人こまがね演劇文化創造劇場

Phone 0265-83-5923

e-mail komazou@ae.wakwak.com

共催／特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

尚、こまがね演劇文化創造劇場にて、ご予算に応じた宿泊先等のご紹介・ご予約を承ります。



主なカリキュラム＜案＞

1. ドラマ教育への招待
 2. 物語を作る
 3. ドラマ教育の目的（ディスカッション）
 4. ロールプレイとティーチャー・イン・ロール
 5. ドラマとスティミュラス
 6. ドラマ・ストラテジー／評価
 7. 授業計画
- 他

「公共性」とアドヴォカシー アートマネジメントとドラマ教育の共通項

中山 夏織

(写真上) シェフィールド・シアターズのユース・シアター。劇場は地域の重要なクリエイティブ・センターの役割を果たしている。
(下) ロンドンのナショナル・シアターに集う様々な人々。ナショナルが問い続けてきたのは、劇場は誰のものなのか…。



ドラマ教育のブックレットを形にして感じたのは、自分自身がドラマ教育を専門としていないから書いたのではないか、ということだ。その道の専門家ほど概説書を書けないということは多々ある。わかっていると、かえって書けないのだ。私が本来書かなくてはならないのは、「アートマネジメントとエデュケーションの関係」についてなのだろうと、わかっているのだが、書かなきゃと思うほど、逃げだしてしまう。似て非なるドラマ教育に自分自身の専門を投影することは、違う視点を提供することにおいて意味はあるわけだが、それじゃだめなのだと、いま自らを戒めている。しかし、「アートマネジメントとエデュケーションの関係」が書けないのは、もう一つ大きな理由がある。文献があっても非常に限られていて、理念として整理するのは個人的な主観に頼るか、あるいは様々な実践事例を紹介してお茶を濁すことになりかねないからだ。その点、ドラマ教育の英語文献の豊富さ、そしてその理念の対立の構造などは、研究者魂をくすぐるものがあり、調べていても、実に楽しい。

アートマネジメントの理念本体の文献も甚だしく少ない。増えてきたが、現場に働くものの視点からは、きれいごとにはすぎないと感じられてしまう。マネジメントの教師としての視点からは、そもそも、営利であれ非営利であれ、公共であれ民間であれ、「アート」以前の基礎的な組織と人のマネジメントが行い得ない環境で、何がアートマネジメントなのかと問いたたくもなる。企業から転じた若い人材が私にぼやいたのは、協働の体系としての現場に、協働する概念を見いだせないことだった。私自身も企業から転じたが、まさに同じことを感じ、ここで生きていかななくてはならないのだと思い知った経験がある。

アートの現場でのマネジメント理念の不在は、管理主体(テクニカルではない)とオペレーションの関係の不可解さに顕著である。管理が役人で、オペレーションが演劇人という形がめずらしくなくなったが、この両者はお互いの領域に職能をこえて侵食したいらしい。自己増殖しながらすべてを裁量下におきたいのが役人で、自分で全部やらなきゃ気がすまないのがアートに働く人間の本質なのかもしれない。悪意がないだけに厄介だ。仕事をやるヒトに権限をあたえる、あるいは役割分担とコミュニケーションという協働の体系は机上の空論に過ぎなくなる。つい、聞きたくなってしまうのは、「そもそも、追求している目的は、一緒なのですか？」。

この問いは、しかしながら、教育にもあてはまるものかもしれない。教育がめざし、到達したいと望む地点自体がどうも曖昧かつ主観的、そして、多分に政治的であったりする。教育は何のために存在するというのだろうか？

教育にもアートマネジメントにも共通していえるのは、不可欠なはずの「公共性」がどうも長く不在のままだということだ。見つめ直す余裕はおろか、自己の抱える矛盾を懸命に正当化しないとやっていられなくなる状況がある。

『イギリスの場合、官と民の間に、あるいは両方を覆う形で、公という概念があるのではないかと男は考える。官は公の一部でしかない。国立と呼んですべてを官に任せてしまうつもりはないし、民として営利にも走らない。イギリスの社会そのものが、大英博物館を作り、維持し、享受してきた。…』

池澤夏樹「パレオマニア―大英博物館からの13の旅」(集英社、2004年)

目的も理念もなしに、ただ惰性にオペレーションを続けていくことを納税者が許す社会に責任があるのか？あるいは、市民を自己中心的なエコノミック・アニマルや「衆愚」に押し込めてきた「官の優位」の問題か。社会を変えられるのはヒトであり、そのヒトを育てるのは教育でしかない。アートは本来、社会批評の機能を持ち、教育を支援する存在であるはずだ。その機能を果たせなかったことを認めなくてはならない。

日本にないのは、「公」という概念を支える、アドヴォカシーという感覚だ。自分を確立させながら、全体を考えていく力といってもいい。ひとりひとりのアドヴォカシーが業界全体の公共性というのかアイデンティティを構築していく。そのためには役人も、研究者も実践家もこれまで当たり前と主張してきたことを一オ尔特ナティブな意見に耳を傾け、自分のこととしてでなく、利益誘導ではなく一疑ってみる必要があるのだろう。自分のことを考えるのは、その後でも十分なのだと思う。ドラマ教育やアートマネジメントが機能すれば、私たちの求めるものは訪れるはずなのだから。

(なかやまかおり／アーツコンサルタント)

シルヴィア・ダウのツールキット 芸術が拓く シニア世代の創造性と学習

第3回

創造性

きわめて重要なことは、芸術を学習する体験の創造的な部分は、可能なかぎりの、高い質によるものだということです。あなたのゴールは一定の学習成果であるかもしれませんが、もしあなたが芸術を入り口の基点として活用するのであれば、芸術は参加者たちに自信を与え、本物であり、かつ有意義な達成感を与えるために、可能な限り、挑戦的で、かつ満足させるものである必要があります。創造性というものは、成果をもつ想像的な過程を扱うものなのです。創造性は考え、行動することについてであり、「行動する」部分は専門家によって奨励され、発展させられるようにすべきなのです。

最初のステップ（創造性を理解する）は、創造的になることは何かを行うことを必然的に伴うことを認識することだ。人々は抽象的には創造的ではない。人々は一数学、エンジニアリング、執筆、音楽、ビジネスや何であれ一何かにおいて創造的なのである。何かを実際に行うことなしには創造的にはなれない。この意味において、創造性は想像力からことなるのである。

Sir Ken Robinson "Out of Our Minds" (2001)

次に、重要なことは、芸術的体験を届けるべく選択する個人あるいは団体が、この方法でいかに活動するのかを知っているということです。

スコットランドには数多くの才能のある芸術家と芸術団体があり、その多くが教育的なコンテキストで活動することに優れた経験を持っています。彼らはその教育的活動のすべてにプロ意識と積極性をもたらしてくれますが、その仕事にこそふさわしい人材を見つけるのは難しいことです。

重要なのは、子どもたちを教えるためなどにアマチュアを用いてはならないということです。芸術においては専門的な実践家を用いることほど重要なことはないのです。

その点では、（スコットランドの）あなたの住む地域のアート・オフィサーは役に立つでしょう。また地元のクリエイティブ・リンク・オフィサーや芸術文化分野の国家機関にコンタクトしてみるのも一つです。ほとんどの芸術団体はエデュケーション・オフィサーを置き、彼らはたいいてい彼らが信頼する、あるいはかつて一緒に仕事をしたあらゆる芸術分野を網羅する優れたネットワークを持っています。彼らは直接的な手助けをしようとする存在であり、もちろんあなたのプロジェクトに対し、彼ら自身の芸術サービスを提供してくれ

ふさわしい創造的パートナーをみつけだす：あなたに求められるのは

- ・ 教育的コンテキストで活動した経験を持っている誰か。
- ・ 高齢者と活動した経験。
- ・ その芸術家あるいは芸術団体とかつて一緒に活動した人々の意見といった、過去の活動の証拠・成果を提示できる誰か。
- ・ その芸術家あるいは芸術団体の芸術的成果を認識しうるもの。芸術セクターのうちでのトラック・レコードをもっていること。
- ・ あなたのゴールを分かち合い、あなたが達成したいと努力していることを理解している誰か。

ます。次のボックスのリストは、ふさわしい創造的なパートナーを見つけだすためのポイントです。

コーディネーション

いかなるプロジェクトにおいても進展するにつれ、マネジメントの負担は大きくなります。とりわけ、マネージャーの範疇外で何かが生じた場合です。学習環境のために芸術活動を活用することを選んだとしたら、あなたはすでにその過程にあるのです。しかし、定着する以前に失敗しないためにうまくマネージされなければならないことが意味するのは、それが非常に珍しいということです。アーティストと協働することはあなたにとって新しいことかもしれませんが、優れたコミュニケーション力、狙い・目的・付託事項などの明快な共通理解をもってすれば、問題というよりは楽しみになりうるものです。

新しい段階に踏み出す前に、優れたマネジメントのためのキーとなる原則を検証してみるのには価値があることではないでしょうか。しかし、まず最初に、そして最も重要なステップは、そのプロジェクトの運営責任を負うのは誰なのかを明らかにすることであり、その人物に確認することです。（あなた自身かもしれませんが）芸術と達成すべき学習のコンビネーションに何を求めるのかについての完全な理解をもつ必要があるのです。

成功するマネジメントと成果のための原則

- ・ 学習と芸術それぞれにとっての明快な狙いと目的が、事前に文書化され、議論されていること。
- ・ パートナーやアーティストらコラボレーターらとの準備と計画についての十分で率直な対話。
- ・ 事前の計画と、完全な準備を軽く見ないこと。
- ・ 適切な評価基準と、関係者による評価基準についての理解
- ・ 目を離さない（Eye on the ball）—水準や手配がすべてでないか、問題が生じてすぐに対処できているかをモニターし続けること。
- ・ 参加者とパートナーたちとのコミュニケーション経路の確立と開示。

キャッシュ

空っぽなポケットでは、決して誰もを引き留められない。空っぽの頭と空っぽの心のみがそうすることができるのだ。

Norman Vincent Peale

シルヴィア・ダウ Sylvia Dow

アーツコンサルタント。
スコットランド生まれ。俳優、ドラマ教師、マックロバート・アート・センター（スターリング大学）のエデュケーション・オフィサー、自治体の芸術担当官などを経て、1995年から2004年、スコットランド芸術評議会エデュケーション部長を務め、様々な芸術と教育プログラムに着手。定年退職後、フリーランスとして芸術と教育の振興のためにスコットランド中を駆け回る。余暇には市民オペラの演出にも携わる。

これまで述べてきたのは、質の重要性、芸術の専門家を導入すること、優れたマネジメント、そしてボトム・アップのコンサルテーションのプロセスについてです。明白なのは、このような活動を実行するためには助成が必要だということでしょう。

スコットランドにはいくつも可能と思われる助成機関がありますが、大切なのは、ふさわしいコラボレーターを見いだすことが、哲学的な意味でのパートナー同様に、助成をもたらすということなのです。

小額の助成であっても多くのことをなしうるでしょう。また、素材や空間を提供することで支援するあり方もあります。少しばかり予算を相殺してくれることになります。

財政ならびに他の支援の可能性を見いだすには時間がかかるものですが、不屈のパートナーシップと、何を成し遂げたいのかについての明快なヴィジョンと、少しばかりの覚悟があれば、なんとかうまくいくものなのです。（次号へ続く）。

TPNドラマ教育ライブラリーNO. 1

ドラマ・イン・エデュケーションードラマ教育を探る12章 著／中山夏織

ドラマ教育に携わるものなら誰もが直面する様々な概念的諸問題を12の章で論じていくブックレットです。英国を中心に発展してきたドラマ教育の理念と実践、その歴史的背景と論争を、文化政策やアートマネジメント、経営学、社会学などの視点も交えて論じています。

A5版、75頁。頒布価格1,200円（送料込み）

郵便振替口座 00190-0-191663 加入者名 シアタープランニングネットワーク

編集後記

ドラマ教育についてまわる問いの一つが、担い手は誰なのか、ということです。私が直接ドラマ教育の現場で指導することはほとんどありませんが、現場で教える方々以上にこの点に関心があります。担い手によって変化するものの存在や、その担い手が活躍しうる基盤整備のことを考えるからです。もちろん、何よりも考えなくてはならないのは、子どもたちのことであり、めざすものが何かということですが。

日本財団のご支援を得て、9月に招聘するロンドン大学のヘレン・ニコルソン博士にひそかに期待しているのは、英国が明確に区分している教師による学校現場でのドラマ・イン・エデュケーションと、演劇人によるシアター・イン・エデュケーションのとの統合とすみわけということです。ニコルソン女史の持つドラマ教師として、演劇人としての二つのアイデンティティが、いかにワークショップの中で統合されるのか、あるいは分裂したものとして残り続けるのか。通訳として現場に入る予定ですが、その経験が、ドラマ教育の担い手の課題に対して何らかの示唆をもたらしてくれることになるだろうと予測しているわけです。

協働者のアイデンティティにふれるのは通訳の役得でもあるのですが、指導者のアイデンティティのありかや揺らぎが多分に実践に影響を及ぼすのも体験的に感じて

きました。ケネス・ティラー先生のアイデンティティは決して揺らぐことのない確固とした教師のそれであり、通訳を見つめる視点も、暖かい教師であるのを感じています。

かつて、ジェームス・ブライニング（ダンディ・レップ芸術監督）が語った言葉を思い出しています。「DIEもTIEも、本質的な根は同じ。統合しうると思うんだ。」ということです。彼はいまメインストリームへと大きく飛躍していますが、この言葉を語った頃、いつかドラマ教育で博士論文を書きたいといっていました。メインストリームで活躍する第一線の演出家によるドラマ教育の博士論文が世にでるような社会こそが、実は演劇全体が必要とするものであり、基盤整備なのかもしれません。

ともあれ、ドラマ教育の夏がはじまります。今年も多くの教師、教育を考える演劇人たちにお目にかかることになります。八木信佳氏とのパートナーシップのもと、はじめて大阪でのワークショップも開催することになります。大阪では大阪府立東住吉高等学校芸能文化科での特別講義やワークショップもあわせて予定しています。旅は私にとっては思いと出会うマーケティングの場でもあります。素敵な出会いを期待しています。（中山夏織）

theatre & policy

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク（TPN）

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のための

セミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。

2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

theatre & policy シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行（隔月間・年6回）されています。定期購読をご希望の方は、TPNの準会員としてご参加下さい。

年会費3千円（送料込み）を下記までご送金下さい。尚、送金の際は、ご住所・氏名・電話番号を忘れずにご記入くださいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座 00190-0-191663

加入者名 シアタープランニングネットワーク